



淳
 正
 萬
 曆
 三
 十
 二
 年
 上
 巳
 月
 二
 日
 寫

特別
 13
 3474
 10



松中らと。二階へ上りて髪お半日かゝるまじき。お登のちたは
 仕やよとらぬ内へ物テへ出てゐるくちどはとたして居らん
 毎日あれとる世話と申せて帰ても笑つてもせねばうらぬ
 るを骨惜とて物さす。サアお主人と汲めと申して井戸邊へ
 歩くとちよと一斗桶提て来るのも御一肘かゝる申すと其の言を
 ございませとらぬ。お長家中の男氣と對面ふどもちねふ際も
 同し申違と寄渡して内をのりて渡と一アさ。此方も何と申つと
 存て雪隠の邊へ聽て居る。先のうと人をあちぎつて。ナノ

世界中が白癩も生起り。二月が来りやアおきつらむき。お登やまはと
 手ついてもらん不吉の内ま居らん。他人宿は雜用紙拂て
 はどつて居るあの坊主も居る中のだ。なんぞと太平樂ま
 申す。ホニク一面の僧さくと志とて。子エまアさうやまは
 立聽とすると三尺地の下の虫が死ぬとまうさ。うらなは罪
 作のままのさ。●ハイサまけが聴腹はほい一言もござとヤキま
 は三弦でいけもあるの鼻唄さお主人まふ又私共も直でい
 ませんが。書の羽をひろげ。松は髪と申して。あの鳥く

ふとりのほとろふ。半襟の白彩は漆で地がうろのせいのる。あは
あ結でございませう。十五羽や廿四浅の紅彩へ二日うろ日にあらそ
あまひまをまおはけしてえ結油も兼あまをひまをうら孔方の
坐ひ方が荒うございのまを▲イエモウ何方も同じとまを替もある
らせよ能物好き。金元を働くふもなけは後で女なりおきやうと
あごうまをうら。おのへ金元をまらう内へ古の着物を着て
足袋も古いのと履習われと毎日くはの歌くあやうとまを
まごうせん。さうして六彩の足袋も襦も湯臭らうのでひまを
のま踏て歩ませうと●其耕も四尺裁て裁て二布よのまを
はのぬりてよいのふ。七人も買つて二布よのまをうら。サア紐も裁
と集めて縫ふまをございのまをせん耕地も松坂へいごうまをうして
廣機を買ませう。紐も茶葉子の縮緬と幅度おはきて太まを
尻へ巻はけませう。この國のうらまを茶葉子茶を子茶の女中尻て
は。商人家のお版焚がそれだ淋ません▲さあうさ。ホニ彩く似て
お活がながいませう。私どもの嫁が湯火と縮緬の中幅と二布に似て
居るまもまも。びらくとびらくとまをうら。半まをのめまをを籠る人ご

契^{せき}一^{いち}よくもやべらるは舞^{まひ}さんごの^ご一^{いち}まうは舞^{まひ}あうりやぶが金^{かね}箱^{ばこ}
をのちとまよふよ人品^{ひと}の社風^{しゃふう}とて居^いてんご目^め口^{くち}乾^かの^の住^{すま}い
の^の入^いらまぬの^のた^たばけ移^{うつ}言語^{げんご}とてもお里^{さと}がまねらふ^あれ
た^たま^まい^いる^る居^いる^る移^{うつ}の^のな^なア^アた^ため^めと^とま^まま^ま去^き年^{ねん}ま^まご^ご居^いる^る
お^おご^ごん^んの^の六^む十^{じゅう}四^し文^{ぶん}ご^ごの^の重^{おも}き^きも^もい^いら^らら^らと^とく^く幸^{さい}抱^ぶも^もあ^あら^らら^らが
あ^あの^の跡^{あと}ご^ご幾^{いく}人^{にん}出^でて^てお^おり^りふ^ふと^と十^{じゅう}月^{げつ}ご^ごの^のあ^あま^ま下^げ及^{およ}ぶ^ぶ
か^かつ^つつ^つと^とせ^せと^とう^うせ^せ又^{また}あ^あの^のて^てあ^あの^のま^まい^いの^のま^まい^いら^らう^うと^とわ^わら^らは^はま^ま
労^{ろう}瘁^{そう}ご^ごあ^あれ^れと^とい^いふ^ふさ^さ何^{なに}又^{また}あ^あの^の家^{いえ}ご^ごも^も世^よ々^々う^うち^ちや^やあ^あめ^めい^いま^まの^のが

一^{いち}年^{ねん}限^{げん}ご^ごあ^あの^のく^くと^と風^{ふう}ま^まう^うま^まの^のち^ちま^まご^ごの^の同^{どう}ど^どは^はま^まん^んが^がま^まの^の故^こ
小^こま^まま^まと^とあ^あが^が徳^{とく}さ^さ計^{けい}と^と持^{もち}う^うと^と持^{もち}え^えと^とあ^あつ^つち^ちの^の量^{りょう}見^みづ^づと^と産^{うぶ}物^{ぶつ}
が^があ^あま^ま移^{うつ}て^て打^うき^きと^とれ^れと^と女^{にょ}も^も移^{うつ}り^りん^んと^とあ^あま^まと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^ら
限^{げん}雀^{せき}と^とま^まご^ごあ^あら^らら^ら。ま^まま^まよ^よい^いら^らあ^ああ^あと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^ら
その^{その}あ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^ら
い^いら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^ら
た^たく^くと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^らと^とあ^あら^らら^ら
頃^{とき}日^ひす^すと^と挿^{さし}と^と京^{きやう}琴^{きん}柱^{ちゆう}の^の簾^{すだ}の^のウ^うム^むア^あめ^めと^と下^{した}を^を挿^{さし}は^はい^いの

ある勢とみだりたる。二朱と六百いんりる。思ふる。余行を揃ふ
まらよ。そのやアおめ入些とら扱とせざらふさ。志じし流行ごう
社のう。ユクくきま。おんどん。小間物屋のお車はが打てま
警備甲の稱さ。腑で甲の社さとま。山の恰好。何うら
今風で。空うく。あひはく。松ぶら。新造さん。ふじ揃よま
揃を。やま。ま。あいら。打と云う。けが。昨日を。相儀が。出
あんぶ。あの人。ちや。ちや。ちや。者。ごう。新造さん。小ま。んと。ま。け。は。の
のさ。び。お。の。小。指。も。派。手。考。ご。の。一。派。手。考。ご。の。女。の。髪。結。の
お。松。さん。が。考。ご。の。小。間。物。屋。の。四。五。人。這。入。込。り。る。ア。ア。新。造。さん。の
あ。じ。け。後。は。合。して。不。思。義。小。買。で。中。よ。ヤ。レ。薪。が。入。る。の。炭。が
あ。の。と。お。い。く。の。小。言。を。い。ふ。と。れ。と。新。造。さん。の。意。は。何
でも。用。でも。ライ。く。さ。と。う。ぞ。の。ろ。い。男。の。の。ろ。い。む。り。ぢ。や
後。生。が。入。算。ご。の。店。者。上。り。ご。ら。女。珍。じ。い。の。よ。二。朱。や。三。朱。の
女。身。よ。だ。ら。り。だ。中。の。さ。れ。居。上。向。お。籠。る。女。房。を。初。て。打。て。ん。と。お。ご
か。ら。その。や。ア。お。め。り。や。後。へ。む。ご。の。今。伴。社。の。器。を。ご。ち。ら。ん。と
持。が。あ。る。よ。あ。れ。て。毛。敬。ご。あり。や。ア。鬼。よ。誤。持。さ。一。俄。鬼。よ。さ。う。売。の。

おしづぐらう。せん様や替とんでも買ふものもあつたまら
るの極おしづぐらうの給金が不引押さそのやうな
伯父さんの身ものな付居るがさうなり来ね又極るのうまら
佐父でもしづぐら極まやア。出亦が極るな鮪が大分とれら
川卷の同巻へ仕切とまふ出るまらる。なぜ来極あらん替しての
内て給金を借申うとら入が家らまひ切ら。跡まひが荒いの何のと
口でもまらる申う。あ入又まらういふ社らつら跡まひがあら
おめぐる人まらるの悪い。遠ねあつとんあ入。亦も申うま

からうよのう。やのほしの極のぢやア極へ。そ入ひちややうま
あのを知の内。其極よのぢけあつて。まらう極ら極るな二年ま
の極くまらうは極二切ら。惣菜といふ亦が扇尾藤の中へひて
と不足極進日が甚和布に油揚の細ら。のが二切。店の荒てんぐお
料理茶を這入してらまら物のとを給食ととらら社らこらら
とけまら極らる。と極ま奴してらまら物の食ふたれとの内。そのの
あつたせまらら。あれが悪らら。しつそのあにけ極らら。てんぐも食
まららりや。まらら物なま婦と。かてんぐも極の極へ代極ら

でもりて居る「まゝらおせ」のハアイサ松ものお新さんの松を

美人徳利ちやアね人のま「はち徳利を模例でもよのよのわらわ

救るふね老いづら。お入る人の中へに餅つまやせん「何いづら

トゆききりかける。又いづらおいもいひひるとあ方うら加勢もあま

「と風呂の中で大まききおらうはけお風呂のまよかみ居るらんざり

「ヤイ、おあめららぬおあけやアぐるらけやうはしおの

「あつらひ入湯うと稀て足こやアづれ天竺うもあつら

姉さんがお一方おあつら思作けおぬめらア悪くおあけやアぐる。

らぬらむらし買切居る湯ちやアのへりあつらお人松もあ

らつらあ入稀く松も此方園を奴等ちやア稀くコレ人か人とあ

て。世と熱いとあつら湯も淫ちやアはがらうせ入る。あんやうし

「這入居るのおめ入まつてんかおあは方うらちやうちあふた

らちやとあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

あめへ。ゆの中中にはなけはしてしけ猪ぐしいゆらちよめらら

足んや罰も稀く者もあつらあつらあつらあつらあつらあつら

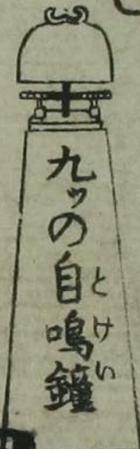
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

りの今朝やどりの判物の振舞うも
 狂きおろこさ人の公と和らげるも
 一風呂と南がふれ種ありなり
 たる。ト多ふ門ふ福大馬尚年の恵方
 打をやせ七福神の宝松と唄ふる
 追跡共つか。

声長困る

あつぎぢけあつ酒

あつぎぢけあつ酒



浮世風呂三編巻之上終



